

第21回庭野平和賞受賞記念講演

北部ウガンダのアチョリ部族間の和解プロセス

ジョン・バプティスト・オダマ

北部ウガンダ紛争

北部ウガンダにおけるこの解決困難な紛争に対する見方や態度は、ウガンダの南北の境界線に大きく影響されております。と言いますのも、[南部の] ルウェロ地域では、アチョリ人は後進性の権化であり、北部の人間たちによる暴力のすべてを代表し、ルウェロ三角地帯でUNLA（ウガンダ国民軍）が行ったあらゆる残虐行為の責任を負うものとみなされたからです。たしかに多くのアチョリ人がUNLAに加わってはいましたが、彼らは決して多数派ではありませんでした。しかし、オボテ政権時代の残虐行為に関して、その後ルウェロの農民へのインタビューをもとにまとめられたいくつかのレポートの中では、アチョリ人たちはあたかもUNLAの兵士たちと同一人物であるかのように扱われ、最悪の行為は常に彼らの仕業とされていたのです（NRA政府設立によるウガンダ人権委員会の報告を参照）。

1986年、戦いに勝った国民抵抗軍（NRA）の兵士の中には、復讐心に駆られてアチョリ人地域にやって来る者がいました。そしてその年から、アチョリ人の強壮な青年たちを標的に、復讐のための殺害や、理由のない逮捕が行われるようになりました。こうした動きに対して、それまで武装解除し、平和を受け入れていたUNLAの元兵士たちの中には、反射的に行動を起こす者が多く現われました。彼らは自衛のために奥地に入り、UPDA（ウガンダ人民民主軍）の下に結集したのです。1988年、グルにおいてNRM（国民抵抗運動）政府との間に「ペセ？和平合意」が調印されましたが、UPDAの一部の過激なグループは合意を拒否し、「預言者アリス・アウマ・ラクウェナ聖霊運動」と呼ばれる精神主義運動に合流しました。この運動はイガンガ地域においてNRM政府軍に敗北しましたが、そこから派生したのがアリス・ラクウェナのいとこのジョセフ・コーニーが率いる「神の抵抗軍」であり、彼らによって、北部ウガンダには今日に至るまで未曾有の破壊がもたらされてきたのです。

地域的な要素としては、ウガンダがスーダン人民解放軍を援助したことへの報復として、スーダン政府が「神の抵抗軍」に対して行った軍事援助や後方支援が挙げられます。これらの援助により、紛争はさらに複雑化しました。そして、アメリカ政府によるスーダン人民解放運動（軍）に対する援助によって、新たに複雑な局面が紛争に加わりました。軍隊の中の違法分子によって小型兵器が拡散したことも、アフリカにおける紛争悪化の要因でした。小型兵器が主な原因となって、人々の生命が奪われ、傷つき、大量の住民が家を追われて難民化し、また人権侵害が行われているのです。

アチョリ社会における和解

アチョリの人々が属するルウォ族には、ラボンゴとギピルという兄弟の絶縁を物語る神話がありますが、この神話がもとになって、絆を断たれることの痛みや和解の必要性に対するアチョリ人の考え方が形作られています。ラボンゴとギピルの間の出来事は、兄弟の絶縁という過ちからアチョリ社会を救い、また和解に向けて心を開いてゆくことの大切さを示す神話として、繰り返し語られ続けてきました。なぜなら、兄弟のような本源的な関係に生じた深い溝は、致命的なものだからです。

ラボンゴとギピルの絶縁は、祖先の槍と玉をめぐる口論から生じたものです。絶縁した後も、兄弟とその家族は、同じナイル川の水を、西岸と東岸から飲んでいました。つまり同じ川の水を利用することで繋がっていたのです。「ワリボ・マ・イ・クル」というアチョリ人のことわざは、このナイル川による絆のことを言っています。

ラボンゴとギピルの祖先神話は、アチョリ人を含むほとんどのルウォ族の社会において価値構造の中核をなしています。そこからはアチョリ人の中に息づいている5つの社会理念が生まれています。それは、

- 1 最初に罪を犯してはならない。
- 2 違いがあっても、すべてのものに敬意を持つこと。
- 3 常に真実を語ること。
- 4 いかなる時も、たとえ首を切り落とされそうになっても、決して嘘をついてはならない。嘘をつくよりも、真実のために命を失う方が望ましい。
- 5 盗んではならない。

アチョリ人にとって、窃盗など聞いたこともなく、予想することすらできない行為でした。アチョリの文化では、若者が泥棒になることなど考えられないことだったのです。子供が泥棒をしたことがわかってしまったとき、それはその子の家族にとっては呪いのようなできごとでした。というのも、その家はもう娘を嫁がせることも、嫁を迎えることもできなくなったからです。だからこそ伝統的なアチョリの家には「キカ」と呼ばれる簡単な引き戸があり、その戸は子供の力でも簡単に開けることができたのです。キカは泥棒除けのドアではありません。というのは、伝統的なアチョリの社会では泥棒は考えられなかったからです。その意味で、キカは伝統的な規範や価値に守られた安全な社会を写し出す鏡だったのです。

アチョリ人の中には死刑に値する犯罪はありませんでした。伝統的にアチョリ社会では、いかなる犯罪者にも死刑判決が下されたことはなく、そのかわりに赦免のための規定が作られました。つまり赦しとは、暴力のない社会の投影だったのです。そのことは、アチョリの社会では、他人をもてなすルールが、いかなる犯罪の意図よりも優先されたことでわかります。たとえば、だれかが私の食べ物を食べ、私の家にあった飲み物を飲んだとします。すると、その瞬間からその人は私の家族の一員となり、私にはその人を守る道徳的義務があるのです。たとえ敵であったとしても、もはや彼らは敵として見られることはありません。これが、いわゆる「敵」という存在との難しい人間関係に対して、アチョリ人がとった人間的な対処方法でした。

責任の受容と懺悔

家族の一人が殺人を犯した場合、その人物の一族や部族全体が、集団全体として罪を負いました。加害者の一族や社会が、被害者側の一族や社会と接触を持つことはありませんでした。しかし、平和と和解への要求は、加害者側の社会に集団として責任を受け入れることを余儀なくしたのです。その後が続くのは、加害者側の人々の、殺人という犯罪に対する集団全体の懺悔と悔恨の思いでした。この段階では、加害者側の社会は弱い立場にあり、殺人の罪悪感が一人ひとりに重くのしかかっているため、和解のプロセスが完了するまで、被害者側との連帯や交流は不可能でした。

赦し

加害者側が偽りのない懺悔の思いを表明したときには、被害者側に残された選択は誠意をもって赦すことだけでした。赦しは和解をもたらすために不可欠な要素でありました。赦しとは、要するに、加害者側に対して差し伸べられた被害者側の寛大な慈悲の表明であり、それなくしては加害者側の社会は死の宣告から逃れることはできませんでした。赦しの保証は加害者側に大きな救いをもたらし、平和への希望を与えるものでした。それは、被害者側の社会が遺された悲しみを負いながらも、和解への途上にあることの保証だったのです。

代償

懺悔が真実かどうかは、加害者側がアチヨリの文化伝統の中で要求されていたように代償を支払う用意があり、また進んで支払おうとする意志を持っていたか否かによって判断されました。代償の内容は、犯罪の性質と状況によって決められました。伝統的には、故意による殺人ではなかった場合、加害者側は家畜10頭を差し出すことが要求されました。しかし殺意が証明されたときは、加害者側は幼い娘を一人、被害者側の社会に捧げなければなりません。代償として捧げられるのは6歳から10歳の年齢の少女で、養子として被害者側の社会の一員となりました。こうした代償は、罰則としてではなく、癒しのプロセスとして、人間性の肯定として、また社会の中の生命の充足のためとみなされたのです。このように代償によって和解への道が開かれ、双方が歩みを進めて互いの距離を縮めることができたのです。

和解の儀式

代償に続いて、第三者の介在で加害者側と被害者側が集められ、「マト・オプト」という大切な儀式が行われました。この和解の儀式の主な特徴は、オプトという樹木の苦い根から作ったジュースを、双方の人間が同じ瓢箪から飲むというものでした。この苦い根っこは、紛争による流血の苦しみを象徴するものでした。赤いオプトのジュースは、人間の神聖なる血の象徴であり、オプトジュースを同じ瓢箪から飲むという行為自体、非常にシン

ボリックなものでした。加害者側と被害者側の双方からひとりずつ、二人の人間が対になって、両手を自分の背中にまわし、苦いジュースをふたり同時に飲みながら互いの頭をくっつけ合うのです。それがひと組ずつ行われ、双方の部族の全員がオプトジュースを飲み終わるまで続きました。

和解の儀式の二つめの特徴は、平和への誓約の証人として祖先の霊と創造主が立ち会う前で食事を共にすることでした。アチョリの文化では、食事を分かち合うことは、つねに人間同士の深い交わりを意味し、それによって他人も家族の一員となったのです。アチョリの人々にとって、深い精神的な交わりや連帯は、毎日の生活を喜びに満たすものでした。

二つの見方

肯定的な見方をすれば、アチョリの人々の間に発生した争いを解決するために、とりわけ計画的な殺人の代償として、少女たちは「救済」をもたらす役割を持っていたと考えられました。加害者側の社会に自分たちの娘の一人を被害者側に捧げる準備があり、また進んでその気持ちを示すことは、和解のためのすべてのプロセスを通して、平和と共存に向けた純粋な決意の表明でした。被害者側の社会の新たな一員となった少女の存在は、互いに傷つき切り離されてしまった二つの社会を結ぶ「コミュニケーションの架け橋」となりました。彼女たちの存在と生命は、双方の社会のすべての人間の生命を保証するものであり、あたかも双方の社会の再生を意味するかのようでした。双方の再生された人間と変容した社会にとって、彼女たちは生命と平和を保証する存在だったのです。

しかしながら、否定的な見方をすると、個人の権利や両性の平等に基づいたアプローチからは、少女たちを代償として扱うことは女性差別であり、加害者側の社会全体の犠牲となる少女たちに対する人権侵害であります。彼女たちは家族から切り離される痛みを負い、社会全体に代わって戦いの苦しみを受けねばなりませんでした。

しかし、いずれにしても、このようにアチョリ人の間で古くから行われてきた慣習に象徴されていたのは、自分たちの仲間による犯罪は、どのようなものであっても集団としての責任があり、集団全体の罪であり、そして集団でその苦しみを負わねばならないということなのです。このことは、あらゆる集団にとって、犯罪の加害者とならないための抑止力となりました。

アチョリ人の共通信念

本来、アチョリ人の社会には裁判所はありませんでした。真理と、自己責任がすべての規範でした。したがって誰もが生活における五つの指針を守るものとされていたのです。人間である限りそれが可能でないこともありました。しかし、もし殺人を犯してしまったとしたら、その第一の目撃者は加害者自身です。フェンスに囲まれた村の入り口で、加害者は自分が殺人を犯したことを告白しなければなりませんでした。儀礼に従って殺人犯はすぐさま穢れを負った者とみなされ、家族やその一族、また部族社会全体との一切の交際を遮断されました。加害者は清めの儀式を受けないと、村への入り口を通り抜けることは許

されませんでした。そして浄めの儀式がすべて終わるまで、彼らは独房に監禁されたのです。監禁されている間は、若い娘がひとり選ばれ、加害者に食べ物や水を与えることが許されました。

ルウォ（アフリカ人）の価値観は人間中心であり、生命の本質である人間関係を基盤としております。つまり、個人は社会の中の存在なのです。人はひとりではなく、家族であろうと、親戚であろうと、部族であろうと、全員がひとつのコミュニティーなのです。

結びに

人類の一員であるという認識が、私たちアフリカ人のアイデンティティーであります。そして人類の一員として、私たちは地球上の人間社会に与えられたすべての特権を享受する資格を持っております。アフリカ人の社会では、人間社会の普遍性は、あらゆる人種やあらゆる言語を話す人々に対して創造主がお与えになった贈り物であると認識され、受容されております。社会なくして個人はあり得ません。「ダノ・ダノ」とは、皮膚の色や考え方、また性別や社会的地位に関係なく、人間は人間であるという意味です。それゆえに、神さまや先祖の霊との間で、また人間同士で霊的な交わりを持ち、愛によって結ばれた仲間になることで、社会や個人は生命の充実を体験するのです。壊れてしまった関係を回復することは、和解を通して人々を変容し、社会を再生する道なのです。

しかしながら、経済的利害や政治権力が引き起こす野蛮極まりない戦争という遺産や、人類に対する犯罪である奴隷売買、そしてアフリカの人々に対する植民地支配は、この先もアフリカの国際関係につきまとうことでしょう。だからこそ、アフリカを搾取する人間たちや支配者とアフリカの人々との間に、国際的な和解が必要とされるのです。

植民地主義の遺産からルワンダ、ブルンジ、コンゴ民主共和国、シエラレオネ、リベリア、チャド、コートジボアール、スーダン、エチオピア、エリトリア、ソマリア、ウガンダの大量虐殺が発生しました。リーダーシップの不足や汚職、民主主義の欠如や人権侵害などは、アフリカの内部的な弱さの指標ではありますが、問題の多い植民地主義の遺産のもとでは、それらが良い方向に展開することはありませんでした。